

【書き下ろしコラム】
今週の
視点
論点
News, Trend Analysis and Opinion

いよいよ年末となってきたが、今年の師走は普段とは違うものとなってしまった。1年間を振り返ると、2020年は新型コロナウイルスに苦しんだ年、となる。当然、農林水産業や食分野にも多大な悪影響が及んだ。

需要面では、以前のコラムでも解説した通り、学校の臨時休校に伴う給食の停止により、牛乳をはじめとした食材に急に余剰が発生することとなった。また、外国人の入国規制によるイ

農業に深刻な被害をもたらした。当面の課題に対して迅速かつ的確に対処することが最重要だが、合わせてこれらを機に、新たな農業モデルをつくることも重要だ。ピンチをチャンスに、の発想である。

コロナ禍においては、いわゆる「巣ごもり需要」が増加した。外食を控える代わりに、宅配や自宅での調理が増えた。店頭や個別宅配で農産物を購入する際に、国産農産物を選ぶことも多いようだ。外食でのメニュー選択の時には、材料が国産品か輸入品かを気にする消費者はさほど多くないが、店頭で購入する場合には国産志向が高まっているという。

肉類を例にデータを見てみよう。巣ごもり需要により国産畜産物の消費量が伸びている。2020年4～10月

ンバンド（訪日外国人）の激減は、高級食材の需要減に直結した。最たる例として、和牛価格の暴落が挙げられる。

日本を代表するブランド農産物である和牛は非常に美味だが値段が高いため、私たち消費者が日頃の食卓で食べるにはハードルが高かった。普段使いの牛肉は、多くの家庭で和牛以外の国産牛や輸入牛だろう。最近、例年並みの価格に戻ったが、高級な和牛の需要を支えていたインバンドや会食・旅行での需要は戻っていないため、先行きは不安が残る。同様にマグロなどの高級魚も在庫が積み上がり、問題となった。

新型コロナウイルスは、農業の生産面にも影響を及ぼした。外国人技能実習生が入国できなくなり、人手不足が顕著となった。今後、農業法人でのクラスターの発生も懸念される。農業法人でクラスターが相次いで発生するような事態になってしまうと、特に畜産・酪農のように生産を止められない品目ではリスクが甚大となってしま

このように、新型コロナウイルスは

の消費額の統計値を見ると、牛肉は前年比117・8%、豚肉は同114・6%、鶏肉は同115・8%と軒並み増加していることが分かる。一方で、牛肉・豚肉・鶏肉などの輸入量は前年比で減少傾向となった。巣ごもり需要の一方で、外出自粛などによって輸入肉類を多く用いていた外食がシェアを落とした結果、国産の畜産物の消費が伸び、輸入が減るといった形となったわけである。

ただし、国産農産物への注目が高まったとしても、供給側がそのチャンスを生かせていないという点も見逃してはいけない。例えば、中国から外食向けのタマネギの供給が滞った際、国内には多くのタマネギがあるにも関わらず、「皮むき処理をする設備がない」との理由で外食チェーンの需要を満たす

コロナ禍だからこそ 未来志向の農業戦略を



三輪 泰史

日本総合研究所 創発戦略センター
エキスパート

みわ・やすふみ

1979年生まれ、広島県福山市出身。東京大学大学院農学生命科学研究科農学国際専攻修了。2004年に日本総合研究所入社。18年7月から現職。農林水産省の食料・農業・農村政策審議会委員をはじめ、中央省庁などの有識者委員を多数歴任。専門は農業再生による地域活性化、先進農業技術の導入支援、農業ビジネスの海外展開支援など。18年6月から農林漁業成長産業化支援機構社外取締役。

本欄は、多胡秀人氏（地域の魅力研究所代表理事）、渡邊准氏（地域経済活性化支援機構代表取締役専務）、井上久男氏（ジャーナリスト）、橋本卓典氏（共同通信社編集委員）、小林美希氏（ジャーナリスト）、三輪泰史氏（日本総合研究所創発戦略センター エクスパート）が交代で執筆します。

時代を読む。

山陰中央新報 政経懇話会

- 多彩な講師陣
- タイムリーなテーマで確かな情報提供
- 松江、米子、浜田、益田の4地区で開催

入会などの問い合わせは

山陰中央新報政経懇話会事務局
tel.0852 (32)3477